

2023年11月18日
旭川地区バスケットボール協会U12部会
技術委員長 中川 明
(文責 伊部 大樹)

2023年度 選手権大会 総評

今大会は、上位大会につながるということもあり、これまで以上に気合が入っていたのではないのでしょうか。しかし、インフルエンザの影響や怪我などにより、悔しい思いをした選手やチームも多かったように思います。そのような状況でも、チーム一丸となって全力でプレーする姿に、選手一人一人の成長が感じられました。

ディフェンス面では、マンツーマンの意識や技術の向上が見られました。ベンチからもプレーする選手に対しての適切な声掛けが増えてきています。また、マンツーマンコミッショナーによる黄色旗に気づいてプレーを自ら修正する選手の姿も見られ、マンツーマンに対する理解力の高まりも感じられました。ディフェンスのポジショニングでは、コート内での空間認知能力(オリエンテーション)が重要な要素としてあげられます。コート内で自分がどこにいるのかを把握することはもちろん、動いているプレーヤーとの距離感を正しく把握することにも繋がります。この空間認知能力が向上すると、「マッチアッププレーヤーが動いているにも関わらず、ステイしてしまう」「ボールマンをはじめ、マッチアッププレーヤーから離れすぎてしまう」などのイリーガルな状況も減り、より適切なポジショニングをすることができるようになります。また、「予測に基づくプレー」が許容されたことで、どのチームもドライブに対するディフェンスの寄りが速くなりました。そのため、ドライブからのキックアウトなど、合わせのシュートも多く見られ、そのシュート決定率が高いチームが上位に残っていたように感じます。ミニバス期では、決定率の低いアウトサイドショットに対しては、チェックが甘い傾向が見られます。しかし、中学校以上のカテゴリーからは、「3Pシュート」があるため、簡単に打たせるわけにはいきません。より高いレベルを目指していくために、ミニバス期でも、アウトサイドショットを簡単に打たせるのではなく、「打たせない距離感で守る」「ボールマンをヘルプに頼らず守り切る」「ヘルプからのローテーションを素早く行う(マッチアップし直す)」「不必要なヘルプは行かない(判断)」といったことを意識していくとよいです。あわせて、間違っただ手の使い方によるファウルが目立っていました。プレッシャーをかけられるようになってきた時に、手の使い方が整理されていると、ファウルトラブルが減ってきます。

オフェンス面では、組織的なオフェンスからディフェンスを崩していく場面が多く見られました。コロナ禍が明け、様々な制約がなくなったことで、チームオフェンスの練習に十分取り組むことができ、試合の中でも発揮できていたのではないのでしょうか。特に、ボールマンに対するスクリーンやハンドオフなどが多かったように思います。しかし、ボールマンに寄って行くことで、逆にスペースを潰してしまったり、ディフェンスに人数をかけて守られたりという場面も少なくなかったかと思います。U12の指導方針として、「1対1のアタック技術の向上」「スペースを活かした1対1、合わせ」などがJBAから示されています。今一度、個々に目を向けることで、将来的には、戦術に頼ったプレーではなく、戦術を活かしたプレーへと繋げていくことができます。今大会では、「ミートが遅れることによるトラベリング」「突き出しの遅れによるトラベリング」「ストップ時のトラベリング」が多く見られていました。個々の1対1技術の向上を図ることで、こういったトラブルも軽減できるのではないのでしょうか。

最後に、今大会を通して、全体的にチーム力の向上が見られました。しかし、ここがゴールではないはずです。上位大会や冬季大会、そして、次のカテゴリーへと続いていく選手もいると思います。より高い競技レベルを目指しながら、「エンジョイ バスケットボール」の精神を忘れず、引き続きバスケットボールを楽しんでください。

以上をもって、選手権大会の総評とさせていただきます。